高等学校の教科としては、道徳ではなく哲学を

―ユネスコ世界哲学の日に考える―

開倫塾
塾長　林明夫

Q：新学習指導要領では、小学校・中学校・高校で、道徳を教科として教育することになるようですね。

A：(1)小学校や中学校などの学校教育で、成長に応じて、人の道としての「道徳」を正式な教科として教育することには、大賛成です。

(2)小学校と中学校の時代に、学年に相応したカリキュラムを組み、人として行うべきこと、行ってはならないことをしっかり教育することは、生きていくうえで不可欠だからです。

(3)ただし、高校では、教科としては、「道徳」ではなく「哲学」を教育すべきと考えます。

Q：なぜ高校生に「哲学」なのですか。

A：(1)人生とは何か、何のために生きるのか、何のために学ぶのか、何のために働くのかなどを自分の力で考え、自分の将来を自分の力で切り開くのが、高校時代だからです。

(2)哲学とは、人生の節目節目で、一つ一つのものごとの「価値（大切さ)」を自分の力で考え、自分にとっての「意味」を考え、自分の力で「意味付け」を行うこと。そのうえで、自分の力で、やるべきこと、やらないことを決定すること。

(3)自分を律しながら、自分なりに「秩序」だった行動をする、これが「哲学する」ことだと考えます。

(4)そこで、学校では、教科としての道徳教育は中学生までとし、高校生には、哲学教育がふさわしいと確信いたします。

Q：高校生に哲学は難しすぎるのではありませんか。

A：(1)そんなことはないと思います。以前、フランス映画「こどもの哲学」を見たことがあります。幼稚園児が「哲学する」様子がよく描かれている名作でした。

(2)フランスの高校生が通うリセでは、高校３年生は文科系で週８時間、理科系でも週４時間の哲学の授業があります。フランスの大学資格入試では、4 時間にわたる小論文やテクスト注釈の哲学の試験が課されています。

(3)日本人は、高校で哲学を教科として学ばないと、大学で哲学を履修しない限り、哲学を学ぶことなく社会に出ることになります。

Q：高校には倫理・社会という教科があるので、いいのではないですか。

A：(1)倫理は、青年期の特質と課題、現代社会の課題とともに、ギリシャ・中国・日本・西洋・現代思想をテーマにしていますので、哲学のかなりの分野をカバーしています。ただし、フランスで行われているような本格的な高校生のための哲学教育は、全くといってよいほど行われていません。

(2)そこで、倫理の教育は高校２年生で行い、哲学教育をフランスのように高校 3 年生で行うのがベストと、私は考えます。

(3)残念なことに、これほど大切な教科なのに、日本では現在、倫理を履修する高校生はあまり多くないようです。

(4)国際関係、経済、ビジネス、政治、法律、文学部など文系学部に進学する人はもちろん、理工学部や医歯薬理系、IT や農業・バイオ関係に進学する人も、この複雑極まりない世界で活動するためには、倫理や哲学の基本的な教育なしでは一歩も進みません。

(5)もし、今回の学習指導要領の改訂に合わないようでしたら、次の改定からでも、高校に哲学教育を入れるべきと提言いたします。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことはありますか。

A：(1)毎年、11 月の第 3 木曜日は「ユネスコ世界哲学の日」です。先生方の塾や学校でも、毎年、11 月第 3 木曜日付近に「世界哲学の日」の行事を行い、哲学に対する興味・関心を喚起していただきたく、ご提案申し上げます。

(2)日本の高校教育の最大の問題は、国民の血税を用いて運営しているにもかかわらず、大学入試対策や就職試験対策など、目の前の「受験」の合格を目的としている学校が数多くあることです。

(3)高校での各教科の勉強は、社会に出てすべて役に立ちます。一生役に立ちます。ですから、一人ひとりの生徒の人生に最も大切な高校での全教科の本質的理解を目的とすべきです。受験勉強に費やす時間は、高校では 1 分もないと私は確信します。高校で行うべきは、哲学の基礎を含む全教科の本質的理解です。受験指導ではありません。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、お読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介いたします。

(1)一冊目は、ジョン・ロールズ著「正義論」紀伊国屋書店 2010 年 11 月 24 日刊です。正義とは何か、個人のかけがえのない自由が認められること、社会がだれにとっても暮らしやすいものであることを論じた名著です。英語版は、John Rawls 著「A Theory of Justice」Oxford 出版がペーパーブックで出ています。

(2)二冊目は、フランスの高校の教科書、ポール・フルキエ著、森有正訳「哲学講義(全４巻)」筑摩書房 1974 年 4 月 10 日刊です。現在は、ちくま学芸文庫から出版されていますので、是非、ご一読ください。フランスの哲学教育では、何がどのように教えられているかがよくわかります。

（3）三冊目は、前田專學著「インド思想入門―ヴェーダとウパニシャッド―」春秋社 2016 年 8 月 18 日刊です。仏教とヒンズー教のもとになったバラモン教の教えを示した前田專學訳「ウパデーシャ・サーハスリー―真実の自己の探求―」岩波文庫、岩波書店 1988 年 4 月 18 日刊と合わせて読むと、東洋哲学の源流がよく理解できます。

（4）道徳を論じるのなら、中国の古典である「論語」とともに「老子」は避けて通れません。「大学」、「中庸」、「孟子」も避けて通れません。

道徳教育の古典として、論語、大学、中庸、孟子の「四書」と「老子」は必読です。ですから、もし、高校の教科として道徳教育をするなら、「論語」の 499 章とともに「老子」の 81 章は、授業で全文を精読すべきと考えます。

（5）このほか、高校倫理の教科書で取り上げられている思想家や宗教家の主要著書は、道徳教育、倫理教育、哲学教育の担い手である先生方の必読書です。

日本史や世界史をお教えになっている先生方の必読書でもあります。

（6）学校や学習塾、予備校で高校生や中学生に専門教科を指導するに際しては、教科書で取り上げられている作品・著作は、たとえ時間はかかっても、コツコツとノートを取りながらすべて読破して授業に臨むことが、社会だけでなくすべての専門教科の先生として望まれます。

（7）各教科ごとの哲学を含む深い学識に支えられて、初めて、本質に迫る授業が可能になるからです。

どうかよろしくお願いいたします。

2017 年 10 月 28 日（土）13 時 35 分